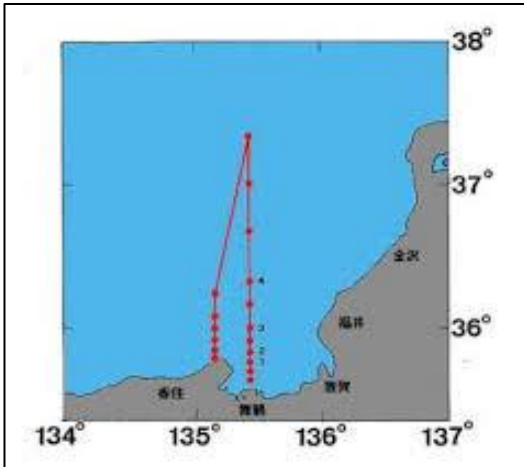
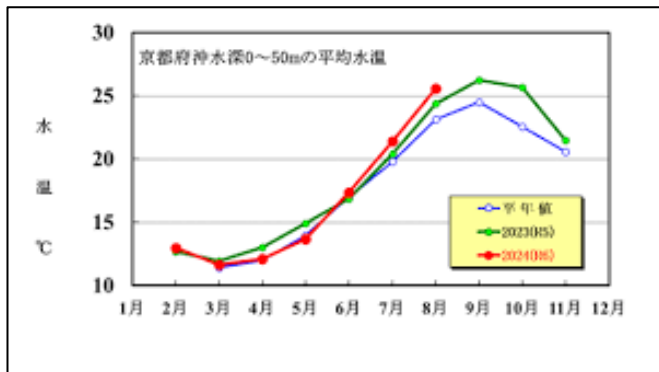


NMO OfficeLetter

京都府沖合海水温度上昇！

京都府沖合の8月度の海水温度が急上昇していることがわかった。表層部分の平均水温が25.6度Cと1964年の観測開始以来、最高値を記録した。丹後半島の沖合で暖流による海水渦が発生したためと推定され、生態系に大きな影響が懸念される。

＜解説＞京都府沖合の表層平均水温は、若狭湾にある冠島沖合8キロから50キロ離れた4地点での平均水温で、水深0～50mの地点。京都府の観測船平安丸



が測定している。今年8月の平均水温25.6度は、平年より2.5度、昨年比較で1.2度高かった。日本海の水温を研究している研究者によると、丹後半島周辺で対馬暖流による暖水渦が発生した可能性が高いと分析している。暖水渦は暖流の流量の増加や岸に近づく現象が原因とされる。流量の増加は地球温暖化などの気候変動の影響を大きく受けている可能性が高い。平均水温が上がると、専門家の見解では「25度以上になると魚の食欲が大きく減少する。30度になると不調を来す。浅いところでの魚が少なくなり、海底の生き物が死んでしまうという生態系の変化が大きくなる。海藻を食べる南方系の魚が多くなり、海藻が減る。実際に、舞鶴湾での養殖のトリガイが死滅したり、成長が鈍ったりするという現象が起こっている。トリガイの耐水温の限界は29

度で、30度を超えると極端に成長が阻害される。現実には約3割のトリガイが死滅した。5割以上死んだという養殖業者もいた。生育が悪くなり、商品価値も大きく下がる。11月に解禁されるズワイガニの漁にも影響は避けられない。海底の水温は2～3度なので、表層温度が高すぎると、カニを網で引き上げる際に死んでしまう。水温が下がることが期待されるが、今年の猛暑の影響は長く残っており、期待薄だ。今後、この猛暑、酷暑が継続し、海水温の上昇が止まらないと、海の生態系に大きな影響を及ぼすことは必至だ。生態系への影響は、漁業者の生活に



京都府農林水産技術センター海洋センター

直結する。これは日本中の沿岸に共通する現象だ。京都府沖合だけの問題ではない。このまま地球温暖化が止まらず、毎年この猛暑、酷暑が続くと、早いスピードで漁業の生態系に大きなマイナスの影響が出る。日本だけで対策が打てる問題ではない。国際的な協力が必要だろう。